

# 下関西高等学校 進路だより

令和6年2月号 進路指導部

## ～2年生いよいよです。3年生は最後の最後までがこう！！～

大学入学共通テストも4年目が終わり、来年度から新課程による入試となります。その中で先日、東京大学が興味深い内容の発表をしました。それは「**カレッジ・オブ・デザイン**」という新たな学部に対応する教育課程の創設です。これは東大が所有する研究資源を最大限に活用しようとする文理融合型の課程で、温暖化などのグローバルな課題に対し、解決策を導くことができる学生を育成することを目標としています。従来のシステムと異なるのは学部の4年間と大学院の1年間を合わせた5年制一貫で修士まで修了できるという点です。定員は1学年100人程度で、半数は留学生、残りは日本の高校を募集する予定です。何を学ぶかは学生が自己決定し、必要に応じて他の学部や大学院の授業を受講でき、1年間は、留学や企業でのインターンシップなど、学外での学びを課す予定です。留学生を世界中から募集するので、欧米の大学に習って秋入学を検討し、授業もすべて英語で行います。募集の概要は来年度中に公表されますが、大学入試改革にもグローバル化の波が本格的にやってきたと実感しています。

ところで、2012年頃から議論が起こった大学入試改革ですが、その中心の一つが「**英語の入試改革**」でした。この議論の内容は多岐にわたり、しかも、私は英語の教員ではないので、詳しく説明することは不可能です。しかし、全てのカテゴリーの大学入試の配点を総合計した時、最も比率が高くなるのは英語であるのは間違いないので、必然的に注目ポイントの一つとなりました。今回、昔の受験生という経験も踏まえ、疑問などを君たちに投げかけるので、英語の学習やグローバルについて考えるきっかけにしてみてください。

まず、これからのグローバル社会に生きる上でスピーキング能力を向上させることは重要であり、読解中心の英語教育に方向転換が要求されていることへの共通理解は社会の中でほぼ確立されている気がします。大学入試における、英語では「**大学入学共通テスト**」の「**リーディング**」で、それまでの「**英語・筆記**」に含まれていた、発音・アクセント、文法問題が消滅し英文読解のみの出題となり、資料も広告、地図など日常生活に関係する内容が大幅に取り入れられ、設問も英文で表記されるようになりました。「**リスニング**」も発話1回のみの問題が配点の高い問題となり、発話には欧米以外の出身者が加わりました。そして、未実施となりましたが、英検やGTECなどの複数の民間試験の導入が予定されました。これについては、日本の高校生全員が大学進学希望者ではないのに、大学入試を利用して、英語教育の議論を行っている点に違和感を覚え、英語教育についての議論は大学入試とは別にすべきだと思いました。私の誤解かもしれませんが、そういう風な動きに見えるのが残念です。

さて、大学入試の全体像や大学の位置づけを意識した時に、コミュニケーション能力や協調性などの社会人基礎力をゼミや卒業研究、サークル活動やアルバイトなどを通して大学時代に磨くことは価値のあることだとは思いますが、学生が身につけるべき最上位のスキルではありません。法令上も、**大学は「専門学校と違い学術研究および教育の最高機関で教育課程の修了に応じ、学士・修士・博士の学位授与を行う機関であり、学部・学科に分かれて、専門教育・研究を行う研究や教養教育をしていく機関」と専門学校とは別のプラットフォームであることが明記されています。**そして、その目的を達成するために、各大学は**自分の大学が求める生徒をアドミッションポリシーや入試問題を通してメッセージとして伝えることが要求されています。**このように考えると、グローバル化された大学機関であっても英語で最も必要なスキルは**リーディングスキル**で、このスキルが不足していると自分の学びの目的が達成できなくなります。逆にこのスキルが十分に身につけている生徒は大学の目標である欧米文化や先行研究に素早くアクセスすることができます。言い換えれば日本語に翻訳されてしまうとストレートに伝わらない文脈を直接、感じることができ、書かれている英語をきちんと理解し、人より早く研究成果をあげた人が優位になるということです。だから、私は英語の入試問題において、主に科学や文化のジャンルの文献を英文で示し、素早く正確に読解できているかを中心に測定し、選抜してきたことは適当だと思います。例えば、先日、行われ  
(次のページへつづく)

た、九州大学の一般選抜前期日程で出題された英語の試験でも、「企業文化」「砂嵐にみる地球の将来」「日本の人口減少社会」など、社会科学や自然科学をテーマとした読解や英作文の問題が出題されています。120分という限定的な条件下での問作としてはベストではありませんが、ベターな方法だと思います。だから、スピーキングなどの他の技能は大学入試で測定するのではなく、他の場面で身につけるべきではないかと思います。

次に疑問に思うことですが、外国語関係の学部に進学する生徒の大半は、その国の文学などの文化を学びたい人よりも英語を話せるようになってキャビンアテンダントやグローバル企業に就職したいの方が圧倒的に多く、大学側も学生募集が気になり、技能中心の英語教育を大学でも展開する流れが強くなっていますが、このことにも違和感を持っています。理由は大学で英語を学ぶ目標が「**お金を儲けること**」「**競争に勝つこと**」が大きくリンクしているように思えるからです。その動機だけで、英語の習得に対して、高いモチベーションを維持できるのだろうか？と思います。西高生の現状を見ても、英語の学習においては、成果が出るまで時間がかかるのは明白なのに、学習時間が少ないというデータが出ています。

ところで、私は約20年前にある高校の普通科英語コースの担任を4年間させてもらったことがあります。そこでは、当然ですが、英語に関して、特に厳しい指導が行われていました。しかし、生徒は習得に苦しみながらも明るい表情で前向きに取り組み、多くの達成感を得ていました。生徒の目標とする進路も1年次は通訳、旅行会社など英語を活かした職業に就くことを希望している生徒がほとんどでしたが、卒業までには大きく変わり、実際に外国語学部に進学した生徒はクラスに1、2名でした。大学卒業後の進路も営業マン、航海士、航空会社の整備士、警察官、大学教員、主婦などバラエティーに富んでおり、デザイナーや映画プロデューサーとして海外などで活躍している卒業生もいます。生徒たちは英語コースを卒業したのは事実ですが、それより在学中からコミュニケーションの内容を各教科の活動や部活動や修学旅行などの特別活動などの経験を通じて蓄積していったので、持っているコンテンツが豊富で、それを伝える為に英語を操ることができています。西高生も指導が手厚く、恵まれた環境下で英語が学べていると思います。しかし、繰り返しになりますが、肝心の自学自習が後回しになっている生徒が多くいるなど感じています。これでは、君たちの知性を十分に発揮することはできません。最初は理解不能の言語を理解し、日本語にない語彙が使える、日本語にない音韻を発音することが面白いと感じ、日本語と違う論理に気づくなどの学びを通して様々な学力を獲得することで自分の視野が広がり、人間としてまた一步、成長できるのだと感じ、主体的に英語にアクセスして欲しいと思います。就職の為だけでなく、学習の先に、新しい文化の習得という未来があることを理解してください。その理解度が上がると、間違いなくモチベーションはアップします。また、自分が好きなことを英語で学ぶことも学力向上のコツだと思います。例えば、数学が好きで、将来は数学オリンピックで活躍したいが、問題は英語で記述されている。だから、英語を頑張るんだという動機はありだと思います。私は大学時代、毎月のように、アメリカのネバダ州ラスベガスで行われていた格闘技の試合結果が気になり、試合があった翌日は大学の図書館にある英字新聞に突進していました。これは、決して知的な活動とは言えませんが、それでも英語を通してアメリカの事を知りたいという欲求がありました。君たちもファッション、音楽など趣味や自分の興味がきっかけでも構わないので、それらを英語で学んでみてください。そして、その時には、音読をしたり、歌を歌ったりなどアウトプットすると学力向上にも繋がります。

最後に、西高生のほぼ全員が大学進学を希望しています。将来を考えると、知性や感性を醸成していくための基盤を高校時代に身につける必要があります。また、大学進学のための目的は「〇〇を学びたい」というベクトルで定めていかないと、「〇〇に就職したいから進学する」だけでは必然的に学びから逃避する学生が多くなるでしょう。「**大きく学ぶ**」ためには産みの苦しみが必ず存在しますが、それを乗り越えるための動機に就職はなり得ません。だから、英語についても大学では高校で学んだ英語を土台にして、その向こう側にある、日本とは違う死生観などの宗教的概念などを学び、視野を広げていくことを目標にして欲しいと思います。現在の日本企業に新卒を一から研修してグローバルな人に育てるだけの余力はないと聞いています。だから、大学の授業でやれという理屈も少々強引だと思います。だから、君たちにもその状況や背景をきちんと理解しながらも、前向きに取り組み、壁を乗り越えるやりがいを感じて欲しいと思います。もがいてください！そして、進学後も通用する真のグローバル力を手に入れてください。

(進路指導部・松村)